

## ソの束縛変項機能

影 山 太 郎

### 1. は じ め に

英語の人称代名詞は自由照応 (1a) の働きを基本としながらも、先行詞が数量詞ないし wh 句を含む場合には束縛変項 (1b) の機能も担えることが知られている (Higginbotham 1980)。

#### (1) a. 自由照応

John<sub>i</sub> still keeps the toy that he<sub>i</sub> played with when he was a kid.

#### b. 束縛変項

Nobody<sub>i</sub> brought his<sub>i</sub> or her<sub>i</sub> family.

(1a) の he は John という個体を指すが、(1b) の his/her は nobody という実体のない対象を指すのではなく、(2) のような論理式における  $x_2$  に相当する。

#### (2) $\sim \exists (x) [x_1 \text{ brought } x_2\text{'s family}]$

このように、代名詞の束縛変項機能は先行詞が演算子——数量詞(no, every, all など) または wh 句 (who, whoever など) ——を含む場合にのみ見られる。GB 理論では、wh 句は統語構造で CP の指定部に移動し、また数量詞句は LF (Logical Form) において IP に付加されて、最終的に各々の Aバー (非項) 位置から代名詞を束縛する、と仮定されている (May 1985)。

さて、上例の英語 his, her に日本語の人称代名詞を対応させると、(3a) は問題ないが、(3b) の「彼、彼女」は不適切である。

#### (3) a. ジョン<sub>i</sub>は彼<sub>i</sub>が子供のころ遊んだおもちゃをまだ持っている。

b. \*誰<sub>i</sub>も彼<sub>i</sub>／彼女<sub>i</sub>の家族を連れてこなかった。

このことから, Saito & Hoji (1983) は「彼, 彼女」が束縛変項になれないと結論づける (ただし, 藤田 (1991) は或る環境では「彼」も束縛変項になれると論じている)。この日英語の違いは, 更に突き詰めれば, 英語の *he* が文脈指示の代名詞であるのに対して, 日本語の「彼」が直示的 (deictic) であることに還元できる (Hoji (1991) も参照)。

(4) (電話で)—Can I speak to Mr. Yoshida? 吉田さんいますか?

—This is he. \*私が彼です。

(3b) に戻って, 「彼」の代りにコソア指示詞を用いると, どうなるだろうか。(もちろん, 照応形の「自分」なら問題ないが, 本稿では「自分」は除外する。)

(5) a. 誰<sub>i</sub>も, \*アノ人<sub>i</sub>／\*コノ人<sub>i</sub>／ソノ人<sub>i</sub>の家族を連れてこなかった。

b. 誰<sub>i</sub>も, \*ア<sub>i</sub>の／\*コ<sub>i</sub>の／ソ<sub>i</sub>の家族を連れてこなかった。

「彼」と同様, 直示的なアとコも不可能であり, ソだけが束縛変項として機能できる。なお, (5b) において「その」が限定詞 (the, that) の意味ではないことに注意。

このようにソが束縛変項として機能できるという指摘は, GB 統語論では Nishigauchi (1990) や Hoji (1991) に散発的に見られるものの, 包括的な議論はない。また, 日本語のコソア研究では堀口 (1990), 正保 (1981), 金水・木村・田窪 (1989), 金水・田窪 (1990) などがこの用法に気づいているが, 単に文脈指示用法の一種と考えているようである。本稿では束縛変項としてのソの機能を観察し, その理論的な意味合いを考察したい。

## 2. 束縛変項としてのソの生起環境

まず, ソの束縛変項としての機能が単純な文脈指示用法と異なることを指摘しておこう。第一に, 指示対象に対する意味的制限の有無がある。

(6) \*山田さんがソの美しい娘を連れてきた。

この文は、「ソの」が「ある特定の」という限定の意味なら適格だが、「山田さん」を受ける意味（正保(1981, 115)の言う「代行指示の用法」）では不適格である。通常の文脈指示においては、ソの代行用法は人間以外のものに限られる。

(7) 鍋はあるけれど、ソの蓋がない。

ところが、束縛変項の意味では、この代行用法のソは人間に適用する。

(8) 誰も、ソの家族を連れてこなかった。

このように、束縛変項として働くソは〔土人間〕の素性について無指定であると考えられる。

第二に、通常の文脈指示のソは、談話において異なる話者の発言内容に言及できる。

(9) A：グアバという果物<sub>i</sub>を知っていますか。

B：ソ<sub>i</sub>って、ハワイの果物でしょう。

他方、束縛変項としてのソとその先行詞は、異なる話者にまたがって生起することは許されない。

(10) A：説明会には誰<sub>i</sub>も来なかった。

B：\*ソ<sub>i</sub>の父親も来なかったの？

(10B) は、文中にソを束縛する演算子を持たないため「開放文」になる。

このように、束縛変項としてのソは、同一文中において厳密に言語的な先行詞——すなわち、演算子——を要求する。本節では、具体的にどのような構文において演算子束縛が可能かを検討しよう。

## 2.1. 関係節演算子

始めに関係節を取り上げる。関係節の分析としては様々な提案がなされているが、基本的には、関係節を導入する演算子（Op）が関係節内の空所を束縛すると考えられている。

(11) [[e<sub>i</sub> 作品が一等に入賞した] Op<sub>i</sub>] 小学生

(11) では空所を e で表示したが、この e の位置にソが現れることができる。

(12) a. ソの作品が 1 等に入賞した小学生

[[ソ<sub>i</sub>の作品が1等に入賞した] Op<sub>i</sub>] 小学生

b. 世界中にソの美しさが知れ渡っている女優

c. ピカソが若いときにソコで暮らした古い家

(12)でソをアないしコで代用できないことに注意。関係節内に現れる代名詞は再述代名詞 (resumptive pronoun) と呼ばれるが、この再述代名詞としてのソは、関係節以外の環境でも生起する。

## 2.2. 題目構文

日本語の特徴の一つに「は」で標示される題目構造がある。題目はD構造において CP の指定部に生成されると考えられるが、この題目表現も再述代名詞のソを束縛することができる。三上 (1960) から例を引用する。

(13) a. 理事は、ソの任期を二年とする。

[理事<sub>x</sub>は]<sub>TOP</sub> x の任期を二年とする

b. 総辞職は、人心の一新がソの理由だった。

c. 日本の文学は、ソレが始まってから、ソの伝統ができたと言えるほどの時間もたっていない。

ここでもソをアないしコに置き換えることが不可能であることを確認したい。

## 2.3. wh 演算子

GB 理論では、wh 疑問文は wh 句を CP の指定部に移動することによって派生され、移動後の wh 句が演算子として wh 痕跡を束縛するとされる。日本語の wh 句「誰、何、どれ」は本来的に疑問詞ではなく、不定代名詞（誰が来ますか？誰も来ない。誰もが来た。）と呼ぶのが適切であるが、いずれにせよ、英語の wh 移動と同様の移動を受けると考えられる。なお、日本語の wh 移動は統語構造ではなく LF で働くわけであるが、その移動先がどこにあるかは議論の余地があろう。英語では、wh 句が CP 指定部に移動するのに対して、everyone, nobody のような数量表現は IP に付加されると考えられている (May 1985)。しかし、日本語の不定代名詞の場合は疑問詞の働きと数量詞

の働きを区別することが困難である。むしろ、日本語の不定代名詞は本質的に量化 (quantification) を受ける必要があるから、LF での wh 移動によって CP 指定部に移ることが義務づけられていると考えるのが自然だろう。すると、その CP 指定部の位置からソを束縛することになる。

(14) a. 誰もソの過ちを認めようとしなかった。

cf. \*太郎はソの過ちを認めようとしなかった。

b. 誰もがソの過ちをすなおに認めた。

cf. \*太郎がソの過ちをすなおに認めた。

c. どの人が、花子がソノ人/\*アノ人をぶったと言ったの? (Hoji 1991)

(14b) の LF 表示は次のようになる。

(15) [誰も<sub>i</sub>が] [ti ソ<sub>i</sub>の過ちをすなおに認めた]

(15)で重要なのは、ソが主語「誰もが」の痕跡 (t) に束縛されていることではなく、演算子位置の「誰も」に束縛されていることである。このことは、(14a, b)において「誰」の代わりに指示名詞「太郎」を用いると不適格になることから分かる。普通の指示名詞句は wh 移動を受けないからである。

なお、(15)では不定代名詞が文の主語であるから、CP 指定部へ移動しているが、次のような例では [ ] 内の表現はD構造で題目位置に生成されていると考えられる。

(16) a. [どんな人であっても], ソの欠点に気づかないことがある。

b. [どの理論も], ソの正しさは完全には証明されない。

#### 2.4. 総称名詞句

次の例では、一見、演算子がないように思えるにも拘らず、ソが許される。

(17) a. 会員は、ソの家族を連れてくることができる。

$\forall x$  ( $x$ =会員) [ $x$ は $x$ の家族を連れてくることができる]

a'. \*山田くんは、ソの家族を連れてきた。

b. 江戸時代の武士とソの暮らし

b'. \*隣のおじさんとソの暮らし

c. 師匠は、ソの弟子を厳しく叱るものだ。

c'. \*きのう、隣に住んでいる落語家がソの弟子を厳しく叱っていた。

d. 人をソの身なりで判断してはいけません。(金水・木村・田窪 1989, 47)

d'. \*山田くんをソの身なりで判断してはいけません。

これらの例において、先行詞となる名詞句は、「総ての～」あるいは「～というものは」という総称的 (generic) な概念を表している。従って、表だった形では現れないものの、LF においては総称演算子と呼ぶべきものを仮定することが妥当であろう。この総称演算子は、通常の全称演算子 (V) とは異なり、単に名詞句を描写するだけでなく普遍的な陳述を表す時制表現も要求するが、その呼応関係をどのように形式化するかをここで論じる余裕はない (総称文の統語構造に関する議論は Brockett (1991), Nishigauchi & Uchibori (to appear) に見られる)。いずれにせよ、ソの先行詞となる名詞句は LF において総称演算子の位置に移動し、そこからソを束縛することになる。この主張が正しいことは、特定の指示を持つ個体名詞句を含む文 (17a', b', c', d') との対比から、明らかである。個体名詞句は演算子と関係しないので、ソの先行詞として解釈できない (ソノが限定の意味でないことに注意)。

なお、特定の指示を持つ名詞句であっても、ソの束縛が可能だと思われることがある。

- (18) a. 宗教的動機と審美的動機との統一という、彼が生きた時代にはすでに不可能になっていたことを、彼 (=ゴッホ) はソの絵で企てた。

(小林秀雄『ゴッホの手紙』 p. 178)

b. 聖徳太子はソの志し半ばにして世を去った。

c. 家康は将軍となったが、ソの暮らしはむしろ質素だった。

d. スヌーピーとソの仲間たち

極めてあいまいな言い方だが、いわゆる有名人はソの先行詞になる資格を持つようである。有名人は、当該の言語社会では総ての人が知っているはずである

から、総称名詞句と対等の振舞いをして不思議ではない。これを全称演算子で記述するのは無理であるが、それに類する演算子（仮に、有名人演算子と呼んでおく）に束縛されていると想定することは可能だろう。そうすると、有名人を表す名詞句は、LF において有名人演算子のところに移動し、その位置からソを束縛することになる。

以上、束縛変項としてのソが生起する統語的環境として、関係節構文、題目構文、wh 演算子構文、及び総称名詞句構文を挙げた。これらの構文では、ソの先行詞となる名詞句は、基底生成されるか移動されるかの違いはあっても、最終的には LF 構造において CP 指定部に位置する。ソの認可には、このAバー位置からの束縛が必須条件となる。既に例示したように、「太郎」や「隣の人」といった通常の指示代名詞は演算子移動を受けず、従って、ソの先行詞となることも出来ない。Aバー位置からの束縛という概念は、次のような用法の関係節にも拡張できよう。

- (19) a. ゴッホが女の問題で苦しんでいるちょうどソの時…（小林秀雄『ゴッホの手紙』 p. 25）

- b. 彼がボーナスで買おうとしているソの車

このような例では、ソは限定関係節の部分を直接指していると解釈できる。このことは、ソをアないしコで置き換えてみると明瞭になる。アないしコを用いると、「アの～／コの～」の部分だけで十分に指示が定まり、付随する関係節は補足説明に過ぎなくなる。

以上の観察から、束縛変項としてのソはAバーの位置から束縛されなければならない、という一般化が得られた。この一般化が正しければ、LF という目に見えない抽象的な構造が言語上の有意義な一般化を規定するために必要であることになる。その意味では、本節の考察は GB 理論で唱えられている LF という統語レベルに対して支持を与えることになる。次節では束縛変項としてのソの中身を理論的に掘り下げてみよう。

### 3. 照応代名詞としてのソ

GB 理論では、有形・無形を問わず名詞句は、照応詞 [±anaphor] か代名詞 [±pronominal] かという2つの素性の組み合わせによって、次のように分類されている。

- (20) [+anaphor, -pronominal] = 再帰代名詞, 相互代名詞 / 名詞句移動  
痕跡

[-anaphor, +pronominal] = 人称代名詞 / pro

[-anaphor, -pronominal] = 指示名詞句 / wh 移動痕跡

[+anaphor, +pronominal] = - / PRO

( / の左側は有形, 右側は無形)

我々が問題にしなければならないのは、束縛変項としてのソがこの分類表のどこに位置付けられるかという点である。

まず、ソが照応形 [+a, -p] として同定できるかどうかを考えてみよう。Chomsky (1981, 1982) を始めとする標準的な束縛理論はA束縛(項による束縛)のみを対象として構築されている。

- (21) 標準的な束縛理論

A: 照応形 [+a] はその統率範疇内でA束縛されなければならない。

B: 代名詞 [+p] はその統率範疇内でA束縛されてはならない。

この枠組では、演算子によって束縛される有形の照応形というものは認められない (Cinque (1990, 158))。他方, Aoun (1985) などの一般化束縛理論ではA束縛とAバー束縛の両タイプを統一的に扱おうとする。

- (22) 一般化束縛理論 (Aoun 1985, 18)

A: 照応形はその統率範疇内でX束縛されなければならない。

B: 代名詞はその統率範疇内でX束縛されてはならない。

(ただし, XはAまたはAバー)

前節で見た日本語ソの振舞いから判断すると、ソは一般化束縛理論でいうところ



ろのAバー照応形（すなわち、ソはAバー束縛されねばならない）と思えるかも知れない。しかしながら、この分析は実際は成り立たない。

(22)の一般化束縛理論Aは、単に、Aバー束縛を受けるということだけでなく、それが起こる領域として「統率範疇内で」という条件が付されている。

(23) 統率範疇

$\beta$  is a governing category for  $\alpha$  iff  $\beta$  is the minimal category containing  $\alpha$ , governor of  $\alpha$ , and a SUBJECT accessible to  $\alpha$ . (Aoun 1985, 24)

この規定に従えば、次のような例では、ソは統率範疇（ここでは、文全体）の中でAバー束縛されているから適格になってしまう。

- (24) a. \*誰<sub>i</sub>が、ソノ人<sub>i</sub>を責めたのですか？  
 b. \*路上駐車<sub>i</sub>は、ソレ<sub>i</sub>を禁止する。  
 c. \*きのうソノ人<sub>i</sub>が店に来た男<sub>i</sub>

このことから、ソを単なるAバー照応形 [+a, -p] と看做するのは妥当でないことが分かる。

逆に、ソは通常の代名詞 [-a, +p] に他ならないと分析されるかも知れない。実際、そのような分析は、現代ヘブライ語の制限的關係節における有形の再述代名詞を論じた Borer (1984) や、寄生空所構文などに見られる無形の再述代名詞 (pro) を論じた Cinque (1990) に既に見られる。しかしながら、ソを単純な代名詞 [-a, +p] と同一視することは、それを単純な照応形 [+a, -p] と考えること以上に不都合である。単純な代名詞ならその統率範疇内で自由でありさえすれば（条件B）、その実際の先行詞は言語的文脈に求めることも、言語外の語用論に求めることもできる。しかしながら、ソの場合は、既に(10)で指摘したように、その先行詞は談話にまで及ぶことはできず、文中に顕現することが必要である。

ソが [+a, -p] でも [-a, +p] でもないとすると、3番目の可能性は [-a, -p] である。これは「ジョン」や「あの男」などの指示表現を含む範疇であるが、束縛変項のソがコ、アの直示と異なることは繰り返し見たとおり

であるから、この  $[-a, -p]$  という可能性も排除できる。

残る可能性は  $[+a, +p]$  である。この範疇は、無形名詞句では PRO が該当する。束縛理論 A によると、 $[+a]$  の要素は統率範疇内での束縛を義務化され、逆に、束縛理論 B によると  $[+p]$  の要素は統率範疇内での束縛を禁止されている。PRO が  $[+a, +p]$  であるということは、束縛理論 A, B を同時に満たさねばならないことになるが、それは不可能であるから、結局、「PRO は統率範疇を持たない」という PRO 定理が生まれる。これまでの研究においては、 $[+a, +p]$  に該当するのは無形の PRO だけであり、有形表現で  $[+a, +p]$  に該当するものは、存在しないとされている。はたして、日本語のソはこの空白に当てはめられるのだろうか。

従来、 $[+a, +p]$  の有形名詞句が排除されているのは格フィルターとの関係である。 $[+a, +p]$  の要素が統率範疇を持たないということは、それが統率されないということであり、統率されない有形名詞句は（統率子によって）格が与えられない。格を持たない有形名詞句は格フィルターによって不適格と判断され、排除される。しかしながら、Chomsky (1982, 104 note 37) がいみじくも指摘するように、そのような有形の  $[+a, +p]$  は、属格構造のように、動詞からの統率でない方法で格が与えられる位置に限れば、可能性がある。実際、前節の例に示されるように、束縛変項としてのソが出現する典型的な統語位置は属格の位置である。次例を比較しよう。

(25) a. 誰<sub>i</sub>もソ<sub>i</sub>の過ちを認めようとしな

b. \*誰<sub>i</sub>が、ソノ人<sub>i</sub>を責めたのですか？

この二文の構造は概略、(26a, b) のようになる。

(26) a. 誰<sub>i</sub>も  $[ti[[ソ]_{NP} の過ちを]_{NP} 認めない]$

b. \*誰<sub>i</sub>が  $[ti[ソノ人<sub>i</sub>を]_{NP} 責めたのですか]$

(26a) ではソのみで独立した名詞句を構成するから、「ソの過ちを」は二重の NP 構造になる。他方、b では「その人」全体が一つの NP であり、主動詞「責めた」に統率されている。この構造上の違いが両者の適格性の違いを生み出している。(26a) の属格「の」をどのように付与するかについては様々な考

え方があるが、少なくとも、主節動詞からの統率によって与えられるものではないことは明白である。格が動詞からの統率によるものではないもう一つの場合は、「で、から」等の格助詞である。

(27) a. 堀江さんが [[ソレ]<sub>NP</sub> で]<sub>PP</sub> 太平洋を横断したヨット

b. \*堀江さんが [ソレを]<sub>NP</sub> 修理したヨット

日本語の格助詞のうち「が」、「を」、及び一部の「に」は動詞ないし形容詞によって付与される構造格である。そのような構造格を伴う再述代名詞 (27b) は認められない。他方、「で」あるいは「から、と」などの実質的な意味概念を標示する格助詞は述語からの統率による構造格ではなく、D構造において独自の投射を形成する意味格である。この意味格を伴う場合 (27a) は、ソが適格である。

以上のように、束縛変項としてのソは述語からの統率によって格を与えられない位置に限って生じることができる。これは、まさに [+a, +p] という指定から予測される通りであり、束縛変項のソは従来、空白とされていた有形の [+a, +p] に該当すると言えよう。

ソが [+a, +p] であるとする、次の問題は、なぜそれがA束縛ではなくAバー束縛を受けるのかという点である。これについては、Katada (1991) の演算子照応形 (operator anaphor) という概念を借用してみる。Katada は、「彼」と「自分」について、前者が三人称単数男性という指定を持つものに対して、後者は人称、数、性の素性が無指定であり、しかも、(28)に見られるような

(28) a. John<sub>i</sub> is hard [Op<sub>i</sub> to please e<sub>i</sub>].

b. This room<sub>i</sub> is easy [Op<sub>i</sub> to sleep in e<sub>i</sub>].

無形演算子 (Op) も生物その他の素性について無指定であることを指摘し、そこから、名詞句素性が無指定のものを演算子照応形と定義している。Katadaによると、演算子照応形はLF構造において演算子の位置に移動しなければならない。この定義をソに当てはめると、ソは人間性その他の素性について無指定であるから、まさに演算子照応形として機能することが必然の結果となる。

このように、ソが演算子に束縛されるべき性質を有するということは、換言すると、ソが変項としての性格を本来的に備えているということである。この性質は弱交差 (weak crossover) と呼ばれる現象にも興味深い示唆を与えてくれる。

弱交差というのは (29a, b) に例示される現象で、通常は容認されない文となる (Koopman & Sportiche (1982), Saito & Hoji (1983))。

(29) a. ?\*Who<sub>i</sub> did his<sub>i</sub> mother see t<sub>i</sub>?

b. \*誰<sub>i</sub>を彼<sub>i</sub>の父親が t<sub>i</sub> 連れてきたのですか?

これを説明するのに Koopman & Sportiche (1982) は次の原則を提案している。

(30) 一対一対応の原則 (Bijection Principle: Koopman & Sportiche 1982)

どの演算子も局所的に唯一の変項を束縛せねばならず、また、どの変項も局所的に唯一の演算子に束縛されねばならない。

つまり、(29a) では単一の演算子 (who) が his と痕跡 (t) の2つの変項を束縛するため不適格とされる。しかしながら、ソを含む次の例は、構造的には (29) と同一であるにも拘らず、弱交差現象を呈さず、文法的である。

(31) a. 会員<sub>i</sub>にソ<sub>i</sub>の家族が t<sub>i</sub> 同行することは禁止されている。

b. 落し物<sub>i</sub>は、ソ<sub>i</sub>の持主に t<sub>i</sub> 返さねばならない。

c. 誰<sub>i</sub>をソ<sub>i</sub>の父親が t<sub>i</sub> 連れてきたのですか?

(31) から、Koopman & Sportiche の一対一対応の原則が強すぎる事が判明した。とりわけ、その前半部分 (一つの演算子は二つの変項を束縛できない) は誤りである。同じ結論を Safir (1984) は英語例に基づいて導き出しているが、Safir の提出した代案 (32) も日本語のソにはうまくいかないように思える。

(32) 演算子束縛に対する平行性の制約 (Parallelism Constraint on Operator Binding: PCOB) (Safir 1984, 615)

一つの演算子が二つの変項 x, y を束縛するためには、x と y は共に無形 (−lexical) であるか、あるいは、共に有形 (+lexical) でなければならない。

上例 (31) では、痕跡は無形であるが、ソは有形であるから、PCOB (32) に符号しない。

既に我々は、ソが本質的に束縛変項としての性格を備えていることを見た。この観点から弱交差の現象を見直すと、例 (31) では、一つの演算子が wh 痕跡とソを同時に束縛しているが、その両方が元来、変項であることに気づく。他方、非文法的な (29) では、痕跡は変項であるが、代名詞 (he, 彼) は元来そうではない。そのような異質のものを単一の演算子が同時に束縛することは理にかなわない。そこで、Safir の PCOB の考え方を次のように修正する。

- (33) x と y が本来的に A ー束縛を要求するもの (変項) なら、単一の演算子が x と y を同時に束縛してもよい。

英語の人称代名詞は、統語的環境によって束縛変項の機能を担うことができるものの、本来は、ソとは異なり、単純な代名詞である。従って、(29a) のような弱交差の環境においては、本来的な演算子 (wh 句) が純粋な変項 (wh 痕跡) と間に合わせの変項 (his) を同時に束縛することになるため、不都合が生じる。ところが、Lasnik & Stowell (1991) が指摘するように、話題化などの構文では、先行詞が A ー位置 (IP 付加) にあるにも拘らず、弱交差の効果が現れない。

- (34) John<sub>i</sub>, I believe his<sub>i</sub> mother loves t<sub>i</sub>.

Lasnik & Stowell は、このような例の適格性を説明するのに、代名詞ではなく空範疇の方に着目し、空範疇が痕跡 (つまり変項) ではなく、特別のゼロ指示詞であると論じている。しかし我々の考え方では、(34) の問題は痕跡ではなく代名詞 his の方に求められる。つまり、弱交差効果を示す wh 句が真の演算子であるのに対し、話題化で IP 付加された John は本来的な演算子ではないから、代名詞としての his (この場合は変項ではない) の先行詞となり得る。(34) の his が変項ではなく代名詞であることは、それを日本語に訳した場合、ソではなく「彼」が対応することから理解できる。

- (35) ジョンを、彼の/\*ソの母親が愛している。

以上を総合すると、弱交差の効果は、真正の演算子が変項と代名詞を混交させ

て束縛するときのみ生じる、と結論できる。英語は特別の束縛変項の形式を持たないから、英語だけを見ていたのではこのような結論は得られない。日本語との対照が重要な手掛かりとなるのである。

## 4. 結 び

小論では、ソが持つ特殊な照応機能として束縛変項の働きを考察し、それが A パー束縛を受ける照応代名詞 [+a, +p] であることを論じた。これは GB 理論の [±anaphoric, ±pronominal] の枠組において従来、空白とされてきた部分を埋めるものと解釈できる。

この結論は、また、日本語の指示詞の体系についても何等かの示唆を与えるものである。従来のコソア研究では、文脈指示用法は一律に直示用法から歴史的に派生してきたというのが一般的な前提のようである (Yoshimoto (1986), 神尾 (1990, 147) など)。コとアについては、筆者もその通りであるが、ソについては、むしろ逆に、文脈指示機能が基本的であると考えてのが妥当である。本稿で観察した束縛変項としての機能はソのみに備わっているもので、コとアにはない。これは、ソが本来的に持つ文脈指示機能がより抽象化されたものと看做せば、説明がつく。

## 引 用 文 献

- Aoun, J. (1985) *A Grammar of Anaphora*. MIT Press.
- Borer, H. (1984) "Restrictive Relatives in Modern Hebrew," *Natural Language & Linguistic Theory* 2, 219-260.
- Brockett, C. (1991) "The Syntax of Generics," *West Coast Conference on Formal Linguistics* 9, 59-74.
- Chomsky, N. (1981) *Lectures on Government and Binding*. Foris.
- Chomsky, N. (1982) *Some Concepts and Consequences of the Theory of Government and Binding*. MIT Press.
- Cinque, G. (1990) *Types of  $\bar{A}$ -Dependencies*. MIT Press.
- 藤田耕司 (1991) 「代名詞と反最小性」『言語研究』100, 42-66.

- Higginbotham, J. (1980) "Pronouns and Bound Variables," *Linguistic Inquiry* 11, 679-708.
- Hoji, H. (1991) "Kare," in C. Georgopoulos and R. Ishihara (eds.) *Interdisciplinary Approaches to Language*, 287-304. Kluwer Academic.
- 堀口和吉 (1990) 「指示詞コ・ソ・アの表現」『日本語学』9:3, 59-70.
- 神尾昭雄 (1990) 『情報のなわばり理論』大修館書店
- Katada, F. (1991) "The LF Representation of Anaphors," *Linguistic Inquiry* 22, 287-313.
- 金水 敏・木村英樹・田窪行則 (1989) 『指示詞』くろしお出版
- 金水 敏・田窪行則 (1990) 「談話管理理論から見た日本語の指示詞」『認知科学の発展 第3巻』, 85-116. 講談社
- Koopman, H. and D. Sportiche (1982) "Variables and the Bijection Principle," *The Linguistic Review* 2, 139-160.
- Lasnik, H. and T. Stowell (1991) "Weakest Crossover," *Linguistic Inquiry* 22, 687-720.
- May, R. (1985) *Logical Form*. MIT Press.
- 三上 章 (1960) 『象は鼻が長い』くろしお出版
- Nishigauchi, T. (1990) *Quantification in the Theory of Grammar*. Kluwer Academic.
- Nishigauchi, T. and A. Uchibori (to appear) "Japanese Bare NPs and Syntax-Semantics Correspondences in Quantification"
- Safir, K. (1984) "Multiple Variable Binding," *Linguistic Inquiry* 15, 603-638.
- Saito, M. and H. Hoji (1983) "Weak Crossover and Move  $\alpha$  in Japanese," *Natural Language & Linguistic Theory* 1, 245-259.
- 正保 勇 (1981) 「『コソア』の体系」『日本語の指示詞』, 51-122. 国立国語研究所
- Yoshimoto, K. (1986) "On Demonstratives KO/SO/A in Japanese," 『言語研究』90, 48-72.